

読書感想文コンクール課題図書リスト

～ 葵大生に贈る名著 20 冊 ～

< 説明文 >

書 名	著者名	著者名	頁数
	請求記号		
一汁一菜でよいという提案	土井善晴著	新潮社	224p
	596/2267		
日常の食事は、ご飯と具だくさんの味噌汁で充分。あれば漬物を添えましょう。無理のない生活のリズムを作り、心身ともに健康であるために「一汁一菜」という生き方をはじめませんか。料理研究家・土井善晴による根源的かつ画期的な提言は、家庭料理に革命をもたらした。一汁一菜の実践法を紹介しながら、食文化の変遷、日本人の心について考察する。著者撮影の食卓風景も数多く掲載。			
置かれた場所で咲きなさい	渡辺和子著	幻冬舎	159 p
	SI/14273		
置かれたところこそが、今のあなたの居場所なのです。時間の使い方は、そのままいのちの使い方です。自らが咲く努力を忘れてはなりません。雨の日、風の日、どうしても咲けないときは根を下へ下へと伸ばしましょう。次に咲く花がより大きく、美しいものとなるように。			
教えるということ	大村はま著	共文社	158 p
	S3/12576		
50年に及んで一教師として教育実践の場に立ち、退職後も新しいテーマを研究・発表しつづけている著者が、本当に“教える”ということはどういうことなのか、具体的な数々のエピソードを通して語った。プロの教師としてあるべき姿、教育に取り組む姿勢について、きびしくかつ暖かく語る。教育にかかわる人をはじめ、教育に関心をもつすべての人々、とくにこれからの社会を担う若い人々に贈る一冊。			
女ことばってなんなのかしら?: 「性別の美学」の日本語	平野卿子著	河出書房新社	213p
	S8/24802		
日本語の「女ことば」―それは、日本人に根付く「性別の美学」の申し子である。翻訳家として西洋語に長年接してきた著者が、女ことばを産んだ土壌とその歴史的背景、およびそこから生じる日本の女と男の関係性を、西洋社会との比較を通して見つめなおす。なぜジェンダー格差はなくなるのか? 日々の日本語を手がかりにして浮き彫りにされる、日本文化の実態。			
「好き」を言語化する技術: 推しの素晴らしさを語りたいのに「やばい!」しかでてこない	三宅香帆著	ディスカヴァー・トゥエンティワン	263p
	S8/24203		
すごく感動したのに「おもしろかった」しか言葉がでてこない...!!16万部突破『なぜ働いていると本が読めなくなるのか』でバズり中の著者が教える文章術の本、待望のハンディ版!せっかく出会えた好きな作品や人について語ることは、あなたの人生の素晴らしさについて語ることなのです!			
スマホ脳	アンデシュ・ハンセン著 久山葉子訳	新潮社	204 p
	S4/21338		
コロナ禍で自宅時間が増え、大人も子供もスマホやパソコン、ゲームやSNSに費やす時間が増えていませんか? 欧米では運動不足や睡眠不足、うつになる児童や若者の増加が問題になっています。記憶力や集中力の低下、成績悪化、心の病まで引き起こす、そんな毎日を一変させる方法をベストセラー『スマホ脳』のハンセン先生が教えます。教育大国スウェーデンの教育現場を変えた、簡単なのに科学的な方法とは!?			

先生はえらい	内田樹著	筑摩書房	175p
	S3/9992		
「先生はえらい」のです。たとえ何ひとつ教えてくれなくても。「えらい」と思いさえすれば学びの道はひらかれる。だれもが幸福になれる、常識やぶりの教育論。			
勉強するのは何のため?: 僕らの「答え」のつくり方	苫野一徳著	日本評論社	207p
	371.1/139		
「なんで勉強しなきゃいけないの?」——誰もが一度は考える、でも誰も答えられないこの疑問に、哲学を使って「納得解」を出す!			
読む力は生きる力	脇明子著	岩波書店	191p
	019/79		
子どもが本を読むことの大切さは誰もが口にしますが、つきつめて考えると、それはなぜなのか、心底から納得できる答えを得るのは案外おずかしい。長年、大学生を教え、「子どもの本の会」を主宰してきた著者が、このテーマに真正面から取り組み、たどりついた成果を、講演のようなやわらかい語り口で説く。			
夜と霧	V・E.フランクフル著 池田香代子訳	みすず書房	169p
	946/5		
心理学者、強制収容所を体験する一飾りのないこの原題から、永遠のロングセラーは生まれた。“人間とは何か”を描いた静かな書を、新訳・新編集でおくる。			

<物語文>

書 名	著者名	著者名	頁数
	請求記号		
推し、燃ゆ	宇佐見りん 著	河出書房新社	125p
	913.6/753		
推しが炎上した。ままならない人生を引きずり、祈るように推しを推す。そんなある日、推しがファンを殴った。第164回芥川龍之介賞受賞。			
君たちはどう生きるか	吉野源三郎 著	岩波書店	339p
	159/134		
著者がコペル君の精神的成長に託して語り伝えようとしたものは何か。それは、人生いかに生きべきかと問うとき、常にその問いが社会科学的認識とは何かという問題と切り離すことなく問われねばならぬ、というメッセージであった。著者の没後追悼の意をこめて書かれた「『君たちはどう生きるか』をめぐる回想」(丸山真男)を付載。			
こころ 改版	夏目漱石 著	新潮社	378 p
	S9/12563		
親友を裏切って恋人を得たが、親友が自殺したために罪悪感に苦しみ、自らも死を選ぶ孤独な明治の知識人の内面を描いた作品。鎌倉の海岸で出会った“先生”という主人公の不思議な魅力にとりつかれた学生の眼から間接的に主人公が描かれる前半と、後半の主人公の告白体との対照が効果的で、“我執”の主題を抑制された透明な文体で展開した後期三部作の終局をなす秀作である。			

こんな夜更けにバナナかよ：筋ジス・鹿野靖明とボランティアたち	渡辺一史 著	文藝春秋	558 p
	S9/18992		
ボランティアの現場、そこは「戦場」だった—筋ジストロフィーの鹿野靖明さんと、彼を支える学生や主婦らボランティアの日常を描いた本作には、現代の若者の悩みと介護・福祉をめぐる今日の問題のすべてが凝縮されている。講談社ノンフィクション賞、大宅壮一ノンフィクション賞をダブル受賞した名著。			
砂漠	伊坂幸太郎 著	新潮社	546p
	S9/3868		
入学した大学で出会った5人の男女。ボウリング、合コン、麻雀、通り魔犯との遭遇、捨てられた犬の救出、超能力対決…。共に経験した出来事や事件が、互いの絆を深め、それぞれ成長させてゆく。自らの未熟さに悩み、過剰さを持って余し、それでも何かを求めて手探りで先へ進もうとする青春時代。二度とない季節の光と闇をパンクロックのビートにのせて描く、爽快感溢れる長編小説。			
センス・オブ・ワンダー	レイフェル・カーソン 著 上遠恵子 訳	新潮社	60 p
	S4/12554		
子どもたちへの一番大切な贈りもの。美しいもの、未知なもの、神秘的なものに目を見はる感性「センス・オブ・ワンダー」を育むために、子どもと一緒に自然を探検し、発見の喜びに胸をときめかせる。			
二十四の瞳	壺井栄 著	角川書店	249p
	S9/3764		
昭和のはじめ、瀬戸内海べりの一寒村の小学校に赴任したばかりの大石先生と、個性豊かな12人の教え子たちによる、人情味あふれる物語。分教場でのふれあいを通じて絆を深めていった新米教師と子どもたちだったが、戦争の渦に巻き込まれながら、彼らの運命は大きく変えられてしまう…。戦争がもたらす不幸と悲劇、そして貧しい者がいつも虐げられることに対する厳しい怒りを訴えた不朽の名作。			
舟を編む	三浦しをん 著	光文社	347p
	S9/18940		
出版社の営業部員・馬締光也は、言葉への鋭いセンスを買われ、辞書編集部に引き抜かれた。新しい辞書『大渡海』の完成に向け、彼と編集部との長い旅が始まる。定年間近のベテラン編集者。日本語研究に人生を捧げる老学者。辞書作りに情熱を持ち始める同僚たち。そして馬締がついに会った運命の女性。不器用な人々の思いが胸を打つ本屋大賞受賞作！			
星の王子さま	サン＝テグジュペリ 著 管啓次郎 訳	角川書店	158p
	S9/6870		
砂漠に不時着した主人公と、彼方の惑星から来た「ちび王子」の物語。人の心をとらえて離さないこの名作は、子供に向けたお伽のように語られてきた。けれど本来サン＝テグジュペリの語り口は淡々と、潔い。原文の心を伝えるべく、新たに訳された王子の言葉は、孤独に育った少年そのもの。ちょっと生意気で、それゆえに際立つ純真さが強く深く胸を打つ。「大切なことって目にはみえない」。感動を、言葉通り、新たに作る。			
本日は、お日柄もよく	原田マハ 著	徳間書店	381p
	S9/9553		
OL二ノ宮こと葉は、想いをよせていた幼なじみ厚志の結婚式に最悪の気分で行っていた。ところがその結婚式で涙が溢れるほど感動する衝撃的なスピーチに出会う。それは伝説のスピーチライター久遠久美の祝辞だった。空気を一変させる言葉に魅せられてしまったこと葉はすぐに弟子入り。久美の教えを受け、「政権交代」を叫ぶ野党のスピーチライターに抜擢された！目頭が熱くなるお仕事小説。			